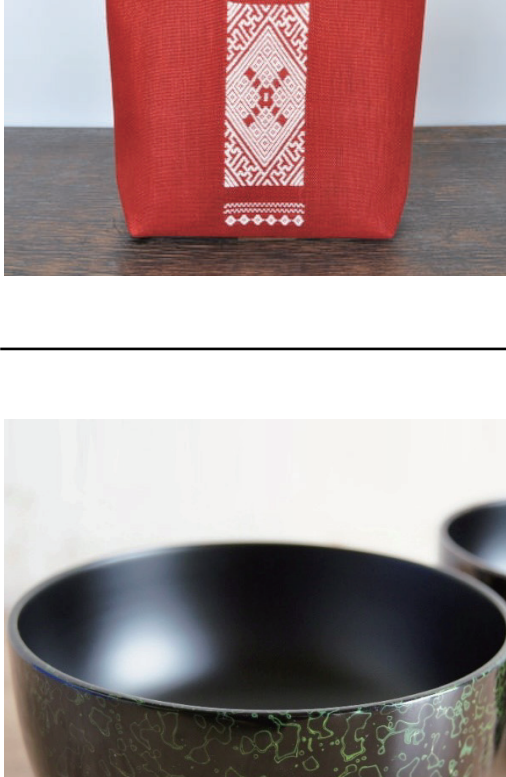


※画像はイメージとなり各会場の出品内容と異なる場合がございます。
※店舗、出展期間はトップページにてご確認ください。
※期間中に品切れとなる場合がございます。
※都合により予告なく出展期間の変更や、出品中止となる場合がございます。

東北地方



【津軽こぎん刺し】弘前こぎん研究所

津軽に伝わる、美しさと強さを高めた刺し子の技。

18世紀中頃、津軽地方の農村で始められたとされる刺し子技法「津軽こぎん刺し」。野良着のことを「こぎん（または、小布、小巾）」と呼んだことから名が付いたといわれています。



【津軽塗】木村漆工房

力強い美しさを作り出す、幾重もの手仕事。

多彩な表情を作り出すために、色彩が複雑に絡まり合い錯綜する唐塗（からぬり）と呼ばれる技法を用いて、下地から仕上げるまでに、四十から五十もの多様な工程を経ています。



【浄法寺塗】

使い込むことで生まれる、艶と味わい。

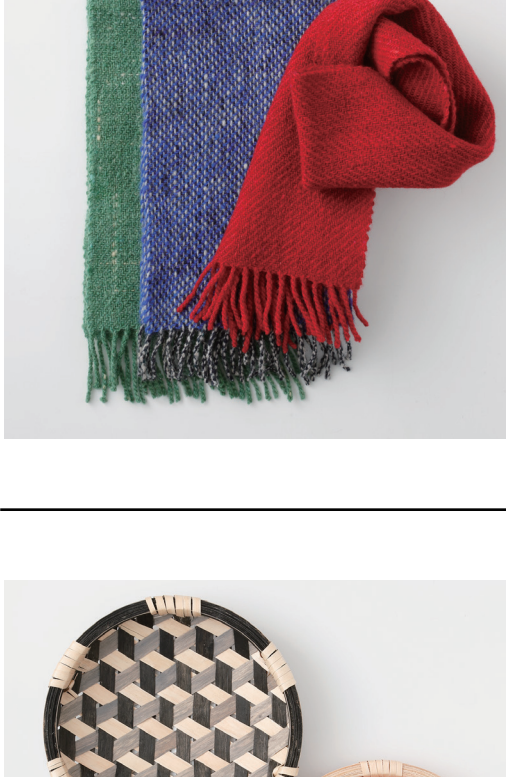
8世紀前半、浄法寺御山の天台宗奥州本山、天台寺の寺僧により作られたのが始まりとされる。若手県二戸市浄法寺町を中心にその周辺地域も含め採れる貴重な国産漆「浄法寺漆」を使用した漆器づくりが今も続く。伝統的な形をした器からモダンな器まで、和食、洋食などさまざまな場面で使用できるシンプルさも魅力のひとつ。



【秀衡塗】丸三漆器

堂々とした風格を纏う、華やかな器。

12世紀、奥州藤原氏に源を発する秀衡塗。どっしりとした形、達者な筆緻の漆絵文様、黒・朱・金を基調とした色感、他の漆器には見られない風格を備えています。



【南部鉄器】佐秋鋳造所

凛とした美しさを放つ、南部鉄器。

良質の鉄が豊富に産出された盛岡近辺にて、江戸時代初期、南部藩主が京都から釜師を招いたのが始まり。当初は、茶の湯釜などを作っていました。が、普段使いに改良したものが現在の南部鉄器です。



【ホームスパン】みちのくあかね会

使うほどに馴染み、味わい深まる。

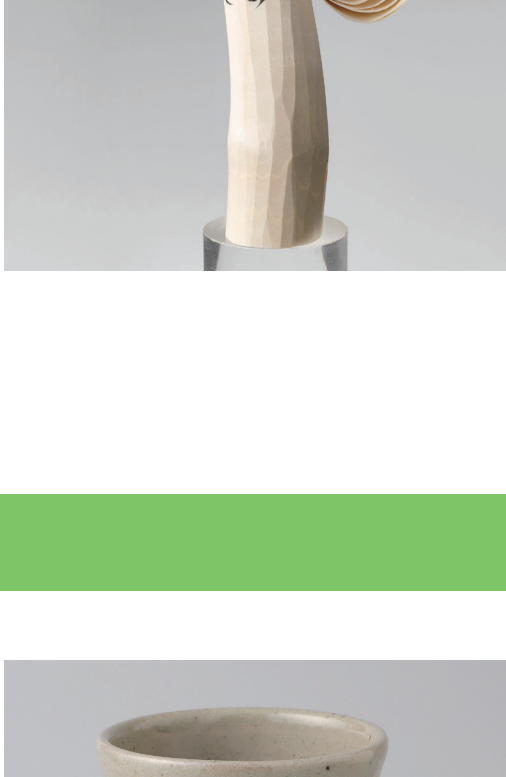
明治のはじめに伝わり、現在も岩手・盛岡にて羊毛の染め、紡ぎ、織りを手作業で行っています。手紡糸の風合い、手織りのあたたかみや軽やかさなど、使うほどに愛着が生まれる手織物です。



【イタヤ細工】民芸イタヤ工房

丈夫で長もち、使うほどに味が出る。

秋田県仙北市角館町の雲然地区で200年以上前から伝わり、冬の閑散期に農具として作られていたイタヤ細工。イタヤカエデの幹を割き、手で編まれる品々は、しなやかで丈夫なつくりになっています。使うほどにテカリや色合いの経年変化も楽しんでいただけます。



【大館曲げわっぱ】栗久

生活の確かな道具として、現代へ。

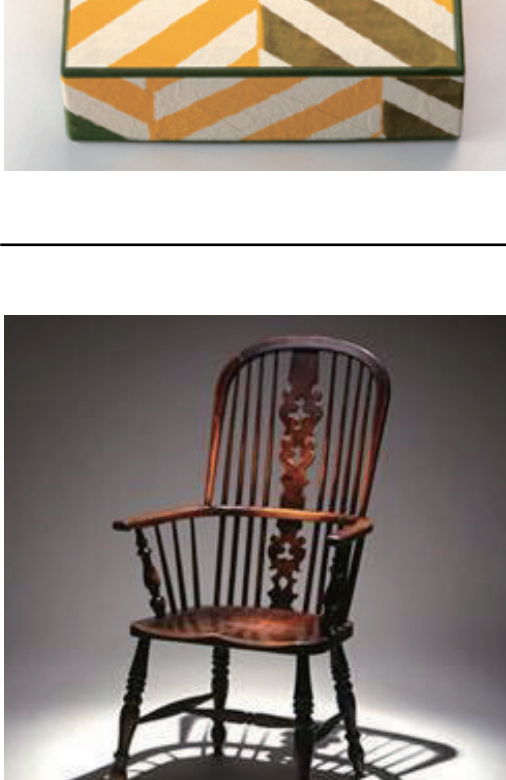
天然秋田杉を素材に柱目の薄板を作り、木地を曲げ、なめした山桜の皮で接合部を縫い留めて完成。400年前、佐竹西家の城主の奨励のもと育まれてきた"曲げわっぱ"は、生活の道具として、現在に受け継がれています。



【ぶどう皮細工】つる工房 鷹山

収穫から仕上げまで、すべて手作業で。

梅雨時期の2週間だけが採取時期となる「山ぶどうの皮」。一度採取すると同じ場所では30年～40年は採取できない為、材料の確保が大変難しくなっています。雪国の厳しい冬の間の仕事として現代まで受け継がれており、材料の採取から完成まで全てが手作業で作られています。

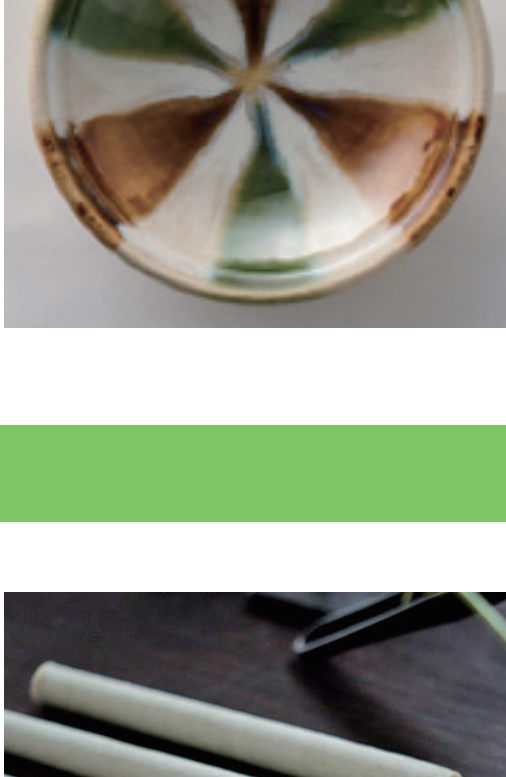


【笹野一刀彫】笹野一刀彫 鷹山

豪雪地米沢に千年来伝承されてきた信仰玩具。

山形県米沢市笹野地区で千年来受け継がれてきた笹野一刀彫。江戸時代に米沢藩主「上杉鷹山」が、豪雪に閉ざされた笹野地区の農民の冬の副業として指導、奨励しました。「サルギリ」といわれる独特な形状の刃物で彫られる作品は、素朴な中にも工人達の技が光ります。

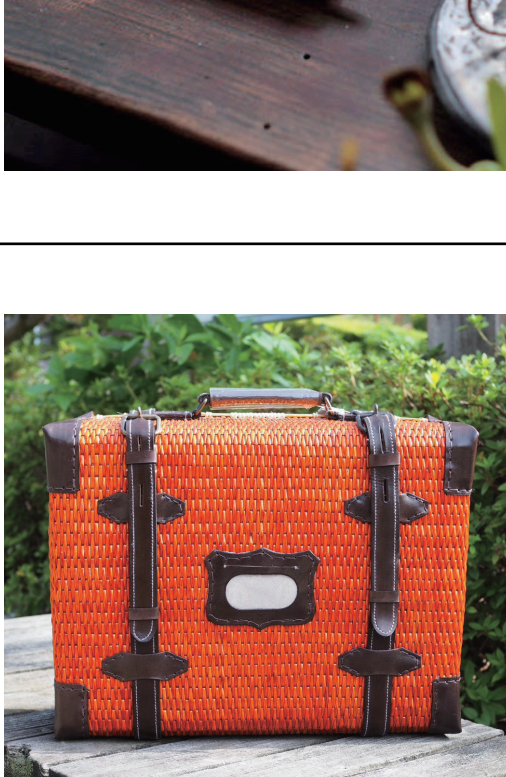
関東・中部地方



【益子焼】濱田窯・佐久間藤太郎窯

濱田庄司も愛した、素朴な土の味わい。

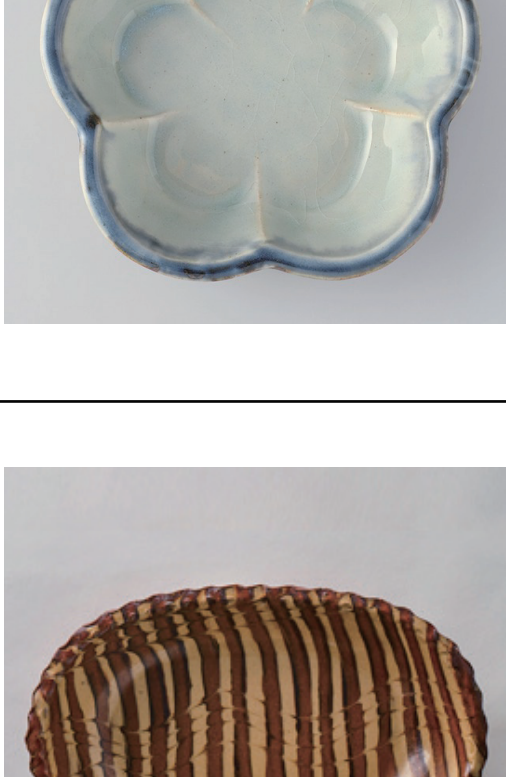
民藝運動の中心人物、濱田庄司が生涯の作陶の地とした益子。当時、多くの生活雑器を産出した益子ながらも無名でした。濱田庄司の影響により、益子町とバーナード・リーチの生きたイギリス、セントアイヴスとの交流は現在も続き、力のある陶芸家が多く生きる陶芸産地となっています。



【箱根寄木細工】るちゑ

自然の色味を巧みに生かした寄木細工。

江戸時代から約200年受け継がれてきた技法を用いて、木材本来の天然の色や木目を組み合わせ、華麗で多彩な幾何学模様などを作り出す全国に例を見ない工芸品。シーボルトの「江戸参府紀行」にも記述が見られます。



【八尾和紙】桂樹舎

美しさと強さを兼ね備えた和紙。

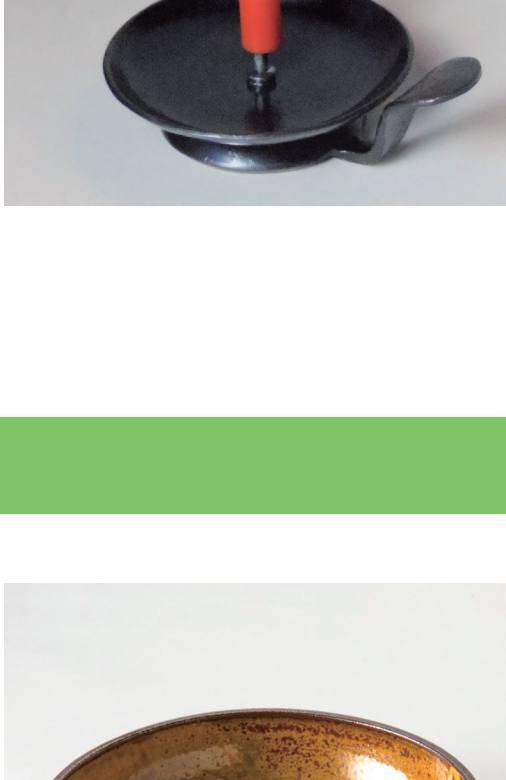
強靱紙と呼ばれる和紙に型染めを施す八尾和紙。和紙への型染めは、芹澤銈介との試行錯誤の末、誕生しました。型染めを施すと布や皮とひと味違う味わいが生まれます。八尾和紙は美しいばかりでなく、加工により丈夫さも兼ね備えているため、幅広い商品に利用されています。



【松本民芸家具】

和と洋が見事に調和するデザイン。

柳宗悦らが当時の松本家具の苦役を惜しみ、産地を激励。その復活への願いに応えるかたちで新たな家具製作の取り組みが松本で始まり、〈松本民芸家具〉が誕生しました。「和」の強さと「洋」のセンスが絶妙なバランスで融合し、洋室、和室どちらでも違和感なく使えます。



【瀬戸焼】瀬戸本業窯

すべての工程を、こだわりの手作業で。

今日の技法は江戸時代初期に確立。〈瀬戸本業窯〉は瀬戸で土物を作り続ける一番大きな窯。柳宗悦らと出会った6代目水野半次郎は民藝思想に深く感銘を受け、「手仕事や伝統を守っていく」決意をしました。全ての工程で手作業に徹し、絵付け等は分業制をとっています。

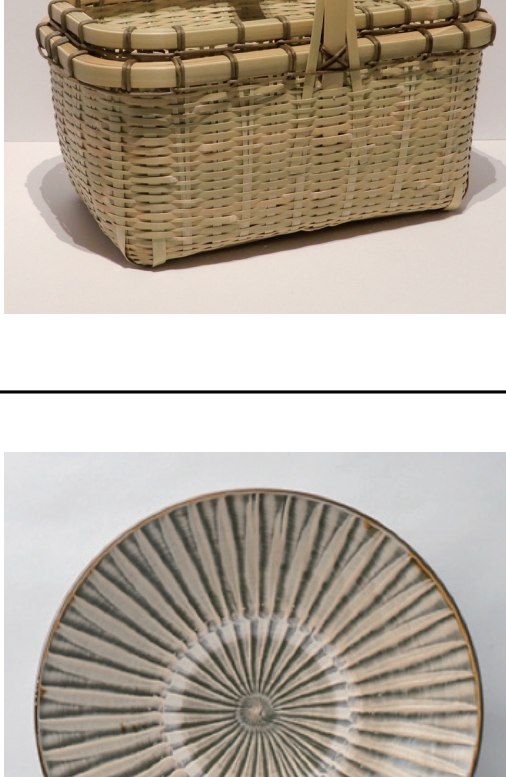
近畿・中国・四国地方



【和蠟燭】大興

地球にも人にも優しい和の光。

またたくような明滅のある灯りで、油煙や匂い、蠟垂れが少ないことが特徴の和蠟燭。近年、米ぬか燭などで作られるものも登場し、食卓やパスルームの灯りや瞑想の際に用いられるなど、環境にも配慮した身近な道具として注目されています。



【豊岡杞柳細工】たくみ工芸

古来の技法を現代へ継承する伝統工芸品。

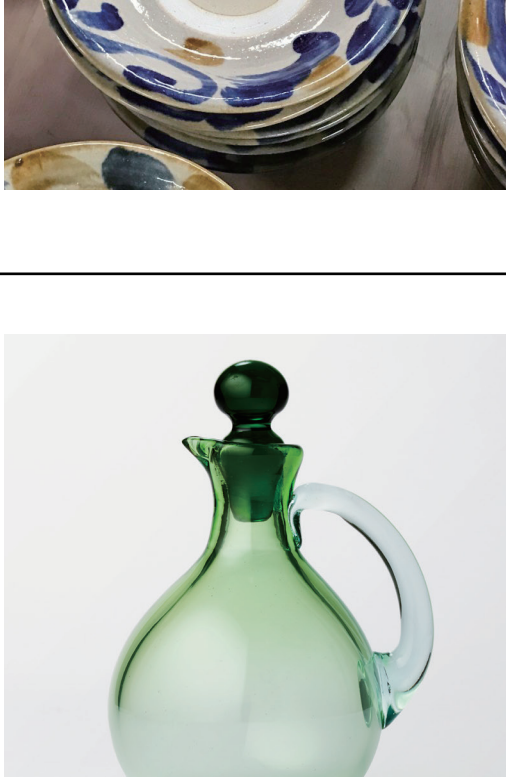
約2,000年の歴史を持つ豊岡の杞柳細工。かつては主に行李（こうり）と呼ばれる大型の入れ物を製作していましたが、現在では伝統の技法を生かしながら、小物入れやバッグなども作っています。



【袖師窯】

暮らしに役立つ焼物を生み出し続ける。

「出雲で見えるべき窯は、袖師であります」と柳宗悦が評した袖師焼。昭和初期から民藝運動に賛同し、河井寛次郎、濱田庄司、バーナード・リーチらに師事。地元粘土を原料に、暮らしの実用品を作ることで袖師窯の伝統を確立しました。



【布志名焼】湯町窯

生活に心地よく馴染む、物作りの心と陶技。

起源は18世紀中頃。松江藩の保護奨励、昭和の民藝運動などにより発展。湯町窯は、地元産出の粘土・釉薬を使って生み出された素朴でシンプルな形、黄釉（おうゆう）・海鼠釉（なまこゆう）・緑釉（りよくゆう）などの深く鮮やかな色調が特徴です。スリップウェアも美しいです。



【出西窯】

モダンな作風で独特の世界観を確立。

柳宗悦やバーナード・リーチ、濱田庄司、河井寛次郎らの指導を受け、モダンな作風から独特の世界観を切り開きました。窯主がいない共同作業場から、現在は株式会社となりものづくりを続けています。「飽きのこない、丈夫な焼物」を理念に掲げています。



【鍛冶】鍛冶工房弘光

鍛冶職人の、伝統の技と心を継承。

古代からの和鉄の産地で、鍛冶職人が活躍した島根県東部で江戸時代に創業。以来10代にわたって打刀刀、小農器具、生活用具、そして剣幕の道に励み、現在も今の暮らしに合う用と美のしつらえを目指して、提案・制作しています。

九州・沖縄地方

【小石原焼】太田哲三窯

350年の時を越えて、生活の中で使われる陶器を製作。

江戸時代初期から実用本位の品々を、蹴り口口による手仕事で登り窯を用いて焼いていた歴史があります。戦後、民藝運動の影響を強く受け、刷毛目、指描きなどの技法で表現される独特の文様が特徴の陶器に。現在約50軒の窯元が伝統の技を受け継ぎながら、新しい作風に挑戦し続けています。

【有田焼】大日窯

海外でも愛された、凛とした美しさ。

日本で初の“白い焼きもの”といわれる有田焼。17世紀初期、朝鮮出身の陶工・李参平（しんぺい）の陶石発見に始まり、江戸時代には国内出荷だけでなく、海外にも輸出されました。大日窯では良質の原料にこだわり、昔ながらの良い肌焼きものを今の生活に生かせるよう作っています。

【青竹細工】青竹工房 桐山

竹を切り、ひごを作り、籠を編む。一貫した工程の手仕事。

竹林での竹の伐採から、籠編みに至る全ての工程を手作業で行っています。「カゴのカチは暮らしのカチ、暮らしのカチがカゴになる。」という理念のもと、堅牢で緻密な編みの暮らしの道具を作っています。

【小鹿田焼】

材料も工程も昔のままに。一子相伝の民窯の器たち。

小鹿田焼の窯元は一子相伝で技術を伝えたため、開窯以来の技法がそのまま保たれており、技法自体が国の重要無形文化財に選定されています。沖繩の濃厚である血山地区には9軒が力を合わせて共同作業を行い、土は川の流れた力を借りて、唐臼（からうす）で砕きます。

【小代焼】ふもと窯

小岱山の良質な粘土から生まれる、力強い風合い。

熊本県北部で江戸時代初期から続く、伝統的な焼きもの。灰釉の流しぐすりをかけるのが特徴で、炎の加減でいろいろな風合いに。色によって青小代、黄小代、白小代、胎小代に分けられています。現在はスリップウェアも数多く手掛けます。

【読谷山焼】北窯

沖縄のやちむん（焼きもの）の伝統を受け継ぐ。

読谷山焼の最大の窯場である北窯では、大型の登り窯を構築、4工房の品物がここで焼かれます。薪はやんばる地方（沖縄県北部）でとれた琉球松などを使用。さまざまな形・絵付けの陶器があります。中でも具須（ぐす）文様は沖縄らしさを表しています。

【琉球ガラス】奥原硝子製造所

大らかな土地柄を映す、ガラスたち。

戦後、アメリカから入ってくる飲料などの魔瓶を利用して作ったのが始まり。沖縄の温厚で伸びやかな土地柄がうかがわれます。奥原硝子では今でも魔材などを利用し、昔ながらの吹きガラスの技法で屈託のない味わい深いガラス器を作っています。

【沖縄の民具】

自生する植物でつくる、暮らしの道具。

島に自生する月桃・アダン・クバなどの植物を使って作られるうちわや草履、バッグなど、島の暮らしの中でながく使われてきた暮らしの道具。

【紅型】紅型工房べにきち

沖縄の歴史と自然から生まれた、独自の染め物。

先の戦力により、壊滅的な打撃を受けた紅型。再建に乗り出した人々の努力により復興し、現在に至っています。沖縄の空と海、自然を取り込んだような鮮やかで大胆な絵柄が特長。

【八重山みんさ一織】あざみ屋

八重山諸島で織られる伝統的な織物。

竹富島や石垣島で古くから伝わるミンサー織。当初は日常的に身に付ける着物の帯として織られていました。5つと4つのマタの絵柄には「いつの世までも永く…」という想いが込められています。